フリースクール卒業生の不登校克服プロセスにおける「場」の空間的要素と情報行動の関連性に関する研究～学校不登校経験者へのライフヒストリー・インタビューの内容分析を通して～

那珂元
ha-naka@tokoha-jc.ac.jp

1. 背景

近年日本では不登校期間が義務教育期間を超えて長期に及ぶ学校不登校児の増加とそれに伴う教育機会の不均衡が問題視されていることを背景に，学校以外の教育施設を通した不登校児への適切かつ継続した学習支援やキャリア支援が国内外を問わず求められている。文部科学省が実施した調査の結果[1)]によると，フリースクール[2)]など学校外の教育施設の社会的な認知度が上昇していることに伴い，基礎学力や就業的スキル，さらには社会適応能力の習得ために学校以外の教育施設への登校・参画を不登校児自身が積極的に臨む傾向が強まっていると報告されており，とりわけ不登校児にとって学校以外の「居場所」の一つとしてのフリースクールなど民間の教育施設への関心や期待が高まっている。また国外においても近い傾向がみられ，例えば米国では不登校児を含む教育機会の提供を必要とする若年者層に対する対策の一つとして学校以外の教育施設や家庭におけるオルタナティブ・プログラムの積極的な運用の必要性が，また EU（欧州連合）では学校で実施される通常のフォーマル学習ではなくインフォーマルやノンフォーマル学習といった既存の学校教育システム以外の場所における学習支援・キャリア支援の必要性が共に訴えられている[3)]。これらは不登校児にとって学校以外の場所の教育的な重要性がますます高まっていることを示唆している。

2. 先行研究

不登校児と場所の関係性についてはこれまで心理学・臨床心理学分野を中心に幾つかの学問分野において論じられてきた。心理学・臨床心理学分野では「居場所」を「一般的には概ね快感情を伴う場所，時間，人間関係等を指[す]」用語として用いられており[4)](石本, 2009, p.94.)，場所が不登校児の心理面や感情を左右する要因として捉えられてきた。また社会学分野では，社会的相互（人間関係）を通して不登校児の自己アイデンティティが変容する場としてフリースクールを捉える朝倉の研究などがある[5)]。また近年では建築学分野におけるフリースクールなど民間施設内での空間利用の実態をみる研究が幾つかある。例えば垣野の研究[6)]では、フリースクール室内でのスタッフ活動における物理的環境としての居場所の選択と利用の実態を調べフリースクール室内の空間的特性として、子どもたちの活動参加の意欲を喚起することを意図したスタッフ活動が子どもたちに見える場所、逆に来客時や子どもの悩み相談時のスタッフ活動が他者に見えない、さらに子どもたちだけによる自由活動と空間の独占を確保するためスタッフがあえて見ない場所の３つの空間特性があることを明らかになった。さらにこの研究では、フリースクール室内ではスタッフが子どもたちの状況変化に応じて３つの特性をもつ空間を組み合わせながら繋げていることも明らかになった。また柴田，生田は子どもが長期的に滞在する「居場所型フリースクール」での子どもたちの空間の利用実態を室内の家具を中心とするゾーン毎に調査した[7)]。その結果、子どもと室内空間との関係性は「パーソナルスペース型」，「コミュニティー型」，および「居場所移動型」の３つのタイプに分類できることがわかった。これら建築分野におけるフリースクール研究は、子どもたちの学習意欲や人間関係づくりなど社会的自立を促す場所環境をいかに構築していくのかという課題に方向性を与えるという意味で非常に意義がある。

図書館・情報学分野（以下 LIS 分野と呼ぶ）における場所に関する研究は，情報共有の場としての場所の研究[8)]，また家の室内における日常のルーチン活動における情報メディア利用の研究[9)]など僅かに存在するものの，総じて発展途上にある。Savolainen(2006)[10)]は，場所（もくはスペース）と情報探索行動との関係性について論じていると思われる LIS 分野内の文献を分析し,場所概念を１）情報探索行動が発生する情報源の格納場所として物理的空間，２）情報探索者による異なる場所にある多様な情報源の選択とアクセスという情報探索行動が発生する物理的な空間，および３）さまざまな情報源（場所）の重要性が情報探索者の変化する文脈に応じて主観的に評価・選択され、それらの情報源が時間的に構築されていく空間的領域の３つのタイプに分けた。この研究では，空間的特性の情報探索行動への影響について明らかにしたが、時間的要因が場所の利用や情報探索行動にどのように関わっているかは明らかならず，「場所の時間的連鎖」については今後の研究課題とした。

場所概念の研究に加えLIS分野においては，不登校児などいわゆる“at-risk”の状態にある若者を対象とした研究についても発展途上にあるが僅かに存在する。例えば Agosto と Hughes-Hassell(2005, 2006)による都市部で生活するティーンエイジャーの情報ニーズと情報源の関連性に関する研究[11)12)]では学校以外のオルタネティブ教育プログラムに参加している人種マイノリティー出身の学生を研究対象にして，ティーンエイジャーの好む情報源（場所）が学校の先生やカウンセラーではなく，学校以外の場所にいる友達や家族であることを明らかにした。Fisher(2007)は場（Fisher は「情報グラウンド」

と呼ぶ）における情報共有に関する一連の研究プロジェクトの最近の研究論文において，健康，社会福祉，および教育など多様な領域のなかで情報に関わるさまざまな問題を抱えている人たちの情報共有を理解する上で，まだ研究されていない特定の人口層に着目する必要性を訴えている[13]。にもかかわらず様々なタイプのマイノリティー・グループは研究者の時間的および財政的制約の点から，あるいは研究成果の有用性の有無の点から LIS 分野において研究の対象になりにくいのが現状である[14]。

3. 研究質問

フリースクール施設の空間利用に関する多くの研究では行動観察による子どもやスタッフの空間の利用実態がミクロ的・短期的な視点で捉えられているが，フリースクールを含めた学校や家、さらには家やフリースクールを起点とした他の居場所との繋がりの有無などよりマクロ的・中長期的な視点から不登校児と居場所との関係を捉えてはいない。したがって本研究では，場所とは不登校児にとってどのような特性と機能性を有しているのか，彼らが不登校時期において複数の居場所とどのように関わっているのか（あるいは関わっていないのか），という基本的な関心を持ちながら，研究対象を長期に渡る不登校経験者に絞り，不登校の時期に多くの不登校児が関わる基本的な三つ場所，すなわち学校，家，およびフリースクールが不登校経験者にとってどのような場所であったのか，また彼らの不登校の時期において上記三つの基本的な場所以外にどのような居場所を利用したのか（あるいは利用しなかったのか）について二点について将来の議論に繋がるような知見を得ることを目的とする。具体的には以下 4 つの研究質問を設定し調査する。

RQ1：不登校児にとって「学校」という場所の持つ特性と機能性は何か？
RQ2：不登校児にとって「家」という場所の持つ特性と機能性は何か？
RQ3：不登校児に対して「フリースクール」という場所の持つ特性と機能性は何か？
RQ4：不登校児の不登校状態克服のプロセスにおいて彼らの居場所がどのように構築されているのか？

4. 方法と対象

不登校経験者 6 名に対して半構造化インタビューのうち「まだ十分に知られていない社会的・歴史的リアリティの側面を照らし出す」[15]質的研究に適しているライフヒストリー・インタビューを実施した。ライフヒストリー・インタビューの採用は，不登校児の居場所の利用や選択の傾向を不登校克服プロセスの経過ごとにみるという本研究の目的に照らしても「妥当性」が確保されると考えた。インタビュー参加者の募集にあたっては，都内のフリースクールを運営している代表者との協議の上，本研究の目的に合致している不登校経験者の紹介をその都度直接受けていくジャッジメント・サンプリング方式[16]を採用した。データの分析方法は，グランデッドセオリー法によるオープンコーディングの手法を使用してインタビューの文字起こしトランスクリプトにコードを付与と概念化を通して不登校経験者と場所との関係性の傾向を分析した。

なおインタビュー参加者 6 名は全員 20 代後半～30 代後半の男性で，ともに同一のフリースクールの卒業生である。内訳として，フリースクール卒業後進学および就職はせず同フリースクールでスタッフとして従事している者が 3 名，フリースクールへは不登校期にスタッフとして関わったがその後進学および就職を選択し現在は社会人である者 1 名，進学および就職はせず家に引きこもっている者 1 名，同様に進学および就職はしないがアルバイトで生計を立てている者 1 名である。

5. 分析結果

インタビュー調査の結果，学校・家・フリースクールという三つの基本的な場所について，不登校経験者に共通してみられる場所の空間的な特性、および不登校児の行動を促進または制約する場所の機能性が見出された。家やフリースクールは不登校児に居心地のよい生活環境や学習機会を提供するが，同時に社会的自立を妨げる可能性もある場所もあるということがわかった。さらに一部の不登校経験者のインタビューからは，Savolainen が今後の課題とした「場所の時間的連鎖」現象と類似する「場所遍歴」、すなわち不登校状態の克服プロセスにおいて家やフリースクール以外のさまざまな場所へ介入を経験しながら自身の行動範囲を広げ社会的自立に繋げていくプロセスを見いだすことができた。

5.1 学校

不登校児にとって学校という場所の持つ 4 つの性質が見出された。

- 学校は，他の別の場所（例えば家）との比較を通して相対的に「危険」な場所であると不登校児によって評価され「居場所」としては選択されなかった場所である。
- 学校とは不登校児にとって，過去から現在に至るまでの不登校児本人のネガティブな体験や感情（いじめ，不安，無気力など）と深く結びついている具体的な「場」を指している空間要素である。（例：「常に意地悪をする同級生がいる教室」といった学校のなかの具体的な「場」）
- 学校は，個々「場」がそれぞれカリキュラムに沿って時系列に連鎖して配列され，体系化されている場所である。

学校の持つ空間的要因として，複数の「場」が時系列的に連鎖している体系化された統合的な

空間であるため，学校のなかの「場」で行われるすべてのイベントへの強制的な介入が求められることである。不登校児は特定の場における特定のイベントに対してネガティブな体験や感情を持っている場合が多い。時間的に連鎖し体系化された場の連続体のなかの特定の場に介入しないという選択をした場合，介入を拒否した場の前後の場への連鎖しているイベントへの介入も同時に困難となり，結果として不登校になるケースが多いことがわかった。

5.2 家

不登校児にとって家という場所の持つ 2 つの性質が見出された。

- 家は，他の場所（例えば学校）との比較を通して相対的に「安全」な場所であると学校不登校児によって評価された「居場所」として選択された場所である。
- 家は，個々の場と場におけるイベントが時系列に連結しておらず，非体系化の構造を持つ場所である。

家という場所は不登校児によって学校と比べ相対的に「安全」であると評価されて，自分の居場所として選択された場所である。また家は個々の場や場内のイベントが非連鎖で体系化されていない場所であり，学校のように時系列で繋がった一連の場への介入が強制的に求められることはない。家の持つ空間的要因のなかで特質すべて点は，家という場所が長期間にわたって家（あるいは自分の部屋）に留まる不登校児にとって家以外の場所へ移動する能力と家を中心とする行動範囲をポジティブ・ネガティブの両面において規定することである。ある不登校経験者のケースでは家での自分の居場所の確実な確保の結果，家以外の場所への積極的な介入活動が促進されたという肯定的な効果が確認できた一方で，別の不登校経験は「安全な」家に長時間居続けることで家という場所への固定化・常態化を招き，その結果「家」以外の場所へのアクセス能力の著しい低下と家を中心とした行動範囲の制約という否定的な効果を示した。

5.3 フリースクール

不登校児にとってフリースクールという場所は「学校」と「家」双方の性質をあわせ持つ，いわばハイブリッド型の空間概念であることがわかった。具体的には以下三つのフリースクールの役割が見出された。

- 非体系化の構造を持つ家へ直接介入し，学校における活動や行動様式と類似した活動を取り入れることで家を体系的な場所へと変換することである。
- 家中心の限定された行動範囲を拡張して，家以外の場所へアクセスする機会を提供することである。
- 家以外での場所における集団活動に介入させることで，不登校児の社会的適応能力を高め社会的な自立を促すことである。

5.4 不登校克服プロセスにおける「場」の構築

フリースクールの役割の一つは，非体系化の構造を持つ家に外部から直接介入して，通常は学校の中で行われるさまざまな体系化されたイベント（特に時間を区切った勉強やスポーツ活動）を家のなかに持ち込むことで，非体系的な空間的および時間的構造を体系的な構造に変換することである。また第二のフリースクールの役割は，不登校児を家の外の体系化された場所（フリースクールや学校など）への介入や参画を促すことである。調査に参加した不登校経験者は，不登校状態の克服プロセスのなかの特定の時期においてフリースクールとの関わり合いを通して家の内部から家の外部へ踏み出し，家の外のさまざまな場所の活動へ介入・参画しながら自身の行動範囲を広げていく「場所の時間的連鎖」の現象を示した。

6. 考察

インタビュー調査の結果分析から，不登校児にとって居場所の空間要因には両義性な問題が発生することがわかった。

- ポジティブは性質：
  （安全，仲間意識，連体感，社会相互性，承認意識，家庭的な居場所）
- ネガティブな性質：
  （危険，仲間はずれ，疎外感，単独，学校への強い所属意識）

空間要因の両義性は，不登校状態克服のプロセスにおける家と不登校児との関係のなかで顕著に表れる。ある不登校経験者は当初の「居場所」である家から早期に離脱し，家以外の複数の居場所に所属しながら青年期の早い段階において社会的自立を確立していった。その一方において別の不登校経験者は家以外の居場所への移行が遅延し自身の社会的自立に至っていないことが示された。

しかしより注目すべき点は，不登校児の学校への再登校や社会的自立を促す役割を担っているフリースクールにおいても家と同様の空間要因の両義性が表れていることである。インタビュー調査に参加した不登校経験者はフリースクールが主催する様々な課外活動への参加を通して連帯感や社会相互性，承認意識など社会的自立に必要とされる能力を身につけている。その一方で，フリースクールでは子どもたちに連帯感と協調性を教えてくため，フリースクール以外の場所における他者との関係性のなかでの失敗体験や挫折感を味わいにくく，また同族意識が極めて強いため「私たち」と「社会の他者」に大きな隔たりが生じる可能性があり，社会に対する恐れの意識が増幅・継続することで結果的に社会でのフリースクール以外の居場所を見出せない。このことは，不登校児の不登校状態克服プロセスにおける居場所の変化や繋がりのメカニズム

に大きな影響を与えている空間的要因であると思われる。

7. 結論と今後の課題

本研究は不登校児が長期にわたる不登校時期において居場所とどのように関わってきたのかというマクロ・中長期的視点から，不登校経験者へのライフヒストリー・インタビューの内容分析を通して，多くの不登校児に密接に関わっていると思われる学校，家，フリースクールという三つの場所に備わっている空間構造的性質，および不登校状態克服プロセスにおける情報源としての居場所の連続性の有無とその傾向について明らかにしようとした。その結果，三つの場所ごとに異なる空間構造的な特性，すなわち場所の中の個々の「場」が時間軸に沿って連鎖している体系化の構造（学校），時間的・空間的に基本的には制約のない非体系化の構造（家），およびそのハイブリット型の構造（フリースクール）を持つことがわかった。また，体系化/非体系化という場所の持つ空間構造的な性質は不登校児の場所に対する評価と選択に影響を与える要因である可能性を見出した。さらに，不登校状態の克服プロセスにおいて家やフリースクール以外の居場所へのアクセス能力と行動範囲が広がっていく，いわゆる場所の「時間的連鎖」の現象も見出すことができた。しかし不登校児にとって家およびフリースクールの二つの場所に関しては，不登校児に肯定的または否定的な行動を促す空間要因の両義性があることも問題点としてわかった。

今後の課題として本研究では明らかにすることができなかった三つの場所の特性および居場所の連続性が不登校児の情報行動，とりわけ彼らの学習行為を伴う情報探索行動にどのように作用しているのかに関する調査が挙げられる。

注・引用文献

1)文部科学省. (2014). 不登校に関する実態調査: 平成 18 年度不登校生徒に関する追跡調査報告書. p.16, p.20.

2)フリースクールの定義については学問分野・領域によって様々であるが、本稿では「不登校児童生徒を受け入れ、相談や学習機会の提供等を民間の団体，施設」とする。

3)那珂 元. (2016). 米国図書館界における at-risk youth の認識と図書館サービス: IFLA, ALA, および YALSA 関連文献の内容分析を通して. 中部図書館情報学会誌, (56), 1-16.

4)石本 雄真. (2009). 居場所概念の普及およびその研究と課題. 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要 / 神戸大学大学院人間発達環境学研究科 編, 3(1), 93-100.

5)朝倉 景樹. (1995). 登校拒否のエスノグラフィー. 彩流社.

6)垣野 義典. (2008). 子どもの居方からみた空間特性. 日本建築学会計画系論文集, 75(656), 2297-2305.

7)柴田 沙希，生田 京子. (2016). フリースクールにおける居場所の空間とその使用状況に関する研究: 名古屋市内の不登校・引きこもり支援団体を対象として. 日本インテリア学会論文報告集, (26), 45-50.

8)Pettigrew, K. E. (1999). Waiting for chiropody: Contextual results from an ethnographic study of the information behaviour among attendees at community clinics. Information Processing and Management, 35(6), 801-817.

9) Crabtree, A., & Rodden, T. (2004). Domestic routines and design for the home. Computer Supported Cooperative Work: The Journal of Collaborative Computing, 13(2), 191-220.

10)Savolainen, R. (2006). "Spatial factors as contextual qualifiers of information seeking" *Information Research, 11*(4), paper261 [Available at http://InformationR.net/ir/11-4/paper261.html]

11)Agosto, D. E., & Hughes-Hassell, S. (2006). Toward a model of the everyday life information needs of urban teenagers, part 1: Theoretical model. *Journal of the American Society for Information Science and Technology, 57*(10), 1394-1403.

12)Agosto, D. E., & Hughes-Hassell, S. (2006). Toward a model of the everyday life information needs of urban teenagers, part 2: empirical model. *Journal of the American Society for Information Science and Technology, 57*(11), 1418-1426

13)Fisher, K.E., Landry, C.F. and Naumer, C. (2006). Social spaces, casual interactions, meaningful exchanges: 'information ground' characteristics based on the college student experience. Information Research, 12(2), paper 291. [Available at http://InformationR.net/ir/12-1/paper291.html]

14)Case, D. O. (2012). *Looking for information: a survey of research on information seeking, needs, and behavior* (3rd ed.). Emerald. P. 361.

15)桜井 厚，小林 多寿子. (2005). ライフストーリー・インタビュー: 質的研究入門. せりか書房. P. 28.

16)Bernard, H. R. (2006). Research methods in anthropology: Qualitative and quantitative approaches. Lanham, MD: AltaMira Press.